

チームかまくら・みらい新聞

メンバー

ぽっぽ/杏/アタック

市民からの声

◆屋内で冒険できる市役所

多目的ゾーンにジップラインやクライミングなどを設置し、雨の日でも体を動かせる遊び場を提案。

◆AI学び体験の定例化

子どもや高齢者向けに、AIやロボットと触れ合う定期ワークショップを開催する学習ゾーンを提案。

◆放課後の第三の居場所

学校帰りの子どもが安心して遊びや宿題ができるよう、支援員付きのプレイタイム空間を整備する案。

◆本と出会うリビング・カフェ

カフェゾーンに年齢別の本棚を配置し、誰でも自由に読書が楽しめるくつろぎ空間の導入を提案。

「未来と、ぬくもりと、本がある場所」

—— AIと学び、ジップラインで遊び、読書でつながる。心を育む市役所の新提案

未来の市役所には、遊び・学び・読書・対話——市民の「こうあったらいいな」が詰まっている。子どもから高齢者まで、世代を超えて心地よくつながる空間。その種が、いま静かに芽吹こうとしている。

◆生成AIが開いた対話の場

未来の鎌倉新市役所に市民の声を反映するため、生成AIでアイデアを可視化。画像生成なども交えながら、2025年5月24日、多様な参加者が意見を交わし、新しい市役所の姿を共に描いた。

◆ちよつと気になる4つの種

ジップラインで遊べる屋内冒険ゾーン、本と会話が生まれるリビング・カフェ、AI学習ワークショップ、放課後の安心スペース。あの時の一言が、未来をちよつとワクワクさせる「きっかけ」になっている。

特集：ひとりじゃないってわかった日

※この画像は生成AIで作成したものです。



社説
(参加者の感想)

と市民の発想が交差した一日。取るに足らないと思っていた思いが、未来のまちをつくる種になる。そんな確かな実感が芽吹いた。

「あめ、やまないね——お気に入りの長ぐつを履いても、外で遊べない雨の日は、なんだかつまらない。

そんな日、ママと行ったのは市役所のリビング・カフェ。

知らないところはちよつとドキドキしたけど、絵本の棚を見たら、さっきまでの気持ちはどこかにいつてしまった。

ページをめくっていたら、「それ、わたしも好きだよ」と声がした。

隣にいたのは、少し年上のおねえさん。

初めて会ったのに、一緒に笑って、ページをめくって、気がついたら友だちになっていた。

雨の日はきらいだった。でも、きょうは好きになれた。

あの場所が、わたしの、たからものになったから。

鎌倉市新庁舎
市民ワークショップ
第1回
2025.5.24.10:00-12:30

— そのとき、子どもが
思わず行きたくなる
市役所ってどんなところ？

かまくら共創便り

メンバー

りゅう、だい、きん

「まちの未来を照らす、子どもたちの声」
— あそび、学び、願い — すべてを包む市民共創のカタチ。

まちの未来を照らす光は、誰かの願いから始まる——。

鎌倉市の新市役所づくりに向け、市民の声が集まった。プラネタリウムや遊び場、発表ステージや夜間開放。

小さな発案が、大きな共創へと歩み始めている。

・まちの中心が、いま静かに変わろうとしている。

◆声が集まる設計会議

2025年5月24日、未来の市役所に届けたい声を持ち寄って、多様な市民が集まった。

子どもや親、働く人、高齢者——それぞれの立場から見える課題や願いを対話の中で重ね、新市役所に込めたい「想い」をかたちにしていく場となった。

◆気になる3つの新風景

プラネタリウムで願いが紹介される親子イベント、子どもが安心して遊べる知育広場、自由に表現できることも発表会、そして夜の市役所開放。

日常と非日常が交差する、新しい公共のかたちが見えてきた。

特集：願いが届いた夜の星

※この画像は生成AIで作成したものです。



社説
(参加者の感想)

市役所の未来を語る場で、市民の自由な発想が交差した。思いもよらぬ視点が飛び交い、共に創る手応えが生まれた一日だった。

毎晩ペランダから星に願いをかける小学4年生の女の子。お母さんは仕事で忙しく、一緒に星を見上げることがなかった。

でもその日、市役所の多目的ゾーンで開かれた「星とおはなしの夜」に人々で参加することに。

満天の星が映し出された室内、静かに響く朗読の声。そして、突然スクリーンに現れたのは「わたしはお母さんと、もっとお話したい」という短い願い。

場内にとよめきが広がり、しばらくしてから優しい拍手が起きた。

隣で手を握るお母さんの目が潤んでいた。「来てよかったね」と言った瞬間、彼女の心に、あたたかな光がともった。

市民からの声

◆親子で楽しむ星とおはなしの夜

市役所多目的ゾーンを活用し、星空上映と絵本の読み聞かせを組み合わせた親子向けイベントを提案。地域住民の参加型運営も視野に。

◆知育と運動が融合した遊び場を

木製遊具や知育ゲームを備えた安全なあそびエリアを放課後に開放。見守り体制も整え、子どもたちの居場所づくりを後押し。

◆習い事の成果を地域へ発信

子どもたちが自由にステージ発表できる日を設ける案。地域が一体となって子どもの挑戦を見守り、成長を応援する場となる。

◆夜の市役所をもっと開放的に

夜間の市役所を開放し、親子イベントや探検型プログラムを実施する提案。市民と役所の新たな関係づくりに期待がかかる。

チー ムカマクラ・コエ

新聞

メンバー

正Boo~/あねちゃん/
あかね/けんちゃん

「はじまりの声、ここに集う」 — 市民の“初めて”が動き出す場所へ

市民一人ひとりの声から始まった、未来の市役所づくり。生成AIでアイデアを形にし、多様な市民が描いた、自分ごとの庁舎構想には、挑戦・表現・つながりの種が詰まっている。

◆AIと描いた新庁舎
生成AIを使って、未来の鎌倉市役所のアイデアが市民の手で生み出された。2025年5月24日、多様な参加者が集い、画像生成や対話を通じて「行きたくなる庁舎」の姿を議論。想像が形となったその過程に、市民参加の新しい形が垣間見えた。

◆はじめてが集う場所
週替わりの体験ラボ、壁一面の、わたし発信、子どもだけの秘密基地、職人と作る木工広場。どれも市民の「やってみたい」から生まれた4つの提案だ。市役所が、暮らしの延長にある、はじめてのチャレンジの場になる日も、きっと遠くない。

特集：はじめての挑戦、冬の午後に



※この画像は生成AIで作成したものです。

社説 (参加者の感想)

争いなく誰もが集える場所を願い、子どもたちの未来に思いを馳せ、大人も子どもも楽しめる市役所を語り合った。今日の対話が、新しい公共の一步となる。

冷たい風にマフラーを巻きつけて、少年は市役所の扉を押した。冬休み直前の放課後、友達に誘われた「はじめて体験ラボ」が気になっていたけれど、ひとりで来たのは初めてだった。この日の講座は「だしの取り方」。初めて握る包丁、初めて感じるかつお節の香り。緊張しながらも、教えてくれたおばあちゃん先生の笑顔に、心がほどこけていく。

「家でやってみる」と小さな声でつぶやいた彼に、先生は「あなたは今日、ひとつ大きくなったね」とにっこり笑った。

それは市役所が、誰かの「はじめて」を温かく包む、そんな場所になった日の物語だった。

市民からの声

◆週替わりの体験ラボを市役所に
市民ボランティアによる料理やスポーツなどの初体験講座を週替わりで開催することで、誰もが気軽に挑戦できる市役所の新しい活用方法を提案。

◆壁が語る、あなたのストーリー
市役所の壁面を、市民の声ウォールとして開放。市民が自由に趣味や活動を発信し、訪れる人同士の交流が生まれる空間づくりを提案。

◆子どもだけの秘密基地空間
小さな入口をくぐると広がる、子ども専用の創造空間。大人は立ち入り禁止で、段ボールや布を使って自由に遊べる秘密基地のような場を提案。

◆市役所にもものづくり工房を
鎌倉彫や木工を楽しめる工房型スペースを新庁舎に設置。地域の職人と小学生から高齢者までが世代を超えて交流できる拠点を提案。